

日本にない大学

高知工科大の「知」

ロボット工学、リハ 自らの経験から、新
 ビリテーション、脳科 たなりハビリの方法論
 学、子どもの創造力育 も考え出した。重いね
 成…。王教授が携わる んさで、脚に1カ月ほ
 分野は多岐にわたる。 どギプスをつけた後の
 本来の専門は「少子高 こと。歩けるようにな
 齢化対策です」。予想 ったが、けがの前とは
 外の答えだった。 感覚が違う。

しかしすべては「必 「脚の筋力が落ちた
 要だから」だ。高齢者 から、それに合うよう
 が増えると、機能回復 に歩くと脳が命令する
 やりハビリの技術的な んですね。ということ
 充実が必要になる。工 はリハビリ初期から、
 学的にアプローチする 健康などときの感覚を脳
 と、例えば機械による 内で再現できれば、そ
 行動の補助となる。 のように歩けるんじや
 ないか」

脳を刺激する
 こうして「認知リハ
 歩いたり立つことが ビリテーション」とい
 困難な人がリハビリに う新分野の研究が始ま
 用いる歩行器。それ自 った。例えば重傷で動
 体が電動などで動けば けないような時でも、
 より多彩なりハビリメ イメージトレーニング
 ニューが実現できる。 やバーチャル映像で脳
 そしてこれは、ほとん の運動野を刺激し、健
 どロボット開発だ。 常などときの感覚を維持

王碩玉教授

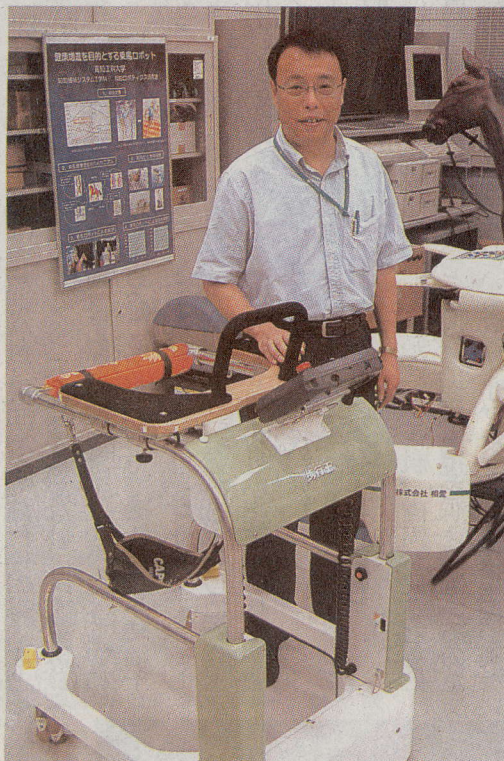
多分野に踏み込む 問題を設定し、解決

〇八〇

する。すると傷が治つ つまりはバランス。大きくて、いばつてい
 たとき、リハビリの期 研究室でのシーズ(発 ると感じた。
 間が短くて済む。これ 想の種)だけでも、現 「でも議論好きだか
 は脳科学の領域だ。 場のニーズだけでも、 らコミュニケーション
 こうして王教授はさ いい製品は作れない。 がとれる」。10年一緒
 まざまな分野に「必要 「学生には、研究室 によってたら、違和感
 だから」踏み込んでい で頑張つて、いいもの を感じなくなつた。
 く。現場にも踏み込 を作つたかどうかの判 「高知の人に近くなつ
 む。歩行器は病院や介 断は現場にしてみらう たのかな」と笑つた。
 護施設に何度も足を運 ようにと言います」。 指導法はシンプル。課
 び、現場の意見を基に 題を設定し、解決する ことを教える。「それ
 改良を重ねた。 が創造性ということ。 現場が判断
 現場が判断
 だからといって現場 現場が判断
 偏重に陥らない柔軟さ 現場が判断
 を持つ。「現場の数だ 現場が判断
 け現実がある。ある現 現場が判断
 場からの要望は、日本 現場が判断
 でそこだけしかないニ 現場が判断
 ーズかもしれない」 現場が判断

現場が判断
 だからといって現場 現場が判断
 偏重に陥らない柔軟さ 現場が判断
 を持つ。「現場の数だ 現場が判断
 け現実がある。ある現 現場が判断
 場からの要望は、日本 現場が判断
 でそこだけしかないニ 現場が判断
 ーズかもしれない」 現場が判断

高知工科大システム工学群教授。山形大学工学部電子情報工学科助教授を経て1998年、高知工科大学助教授。中国・福建省出身。



「だれでも創造的になれる」と話す王碩玉教授(香美市の高知工科大)

四万十・川の駅 カヌー館長

田辺 篤史さん (39) 四万十市西土佐用井



<59>

川バカンス

「四万十川で非日常的な 生活を味わってもらつ」とみは外部委
 いうのが、1990年に開 時折」なが
 館したカヌー館の方針。関 尚のぐたぐ
 西からUターンし、200 している。
 0年に同館へ入つて以来、 サイトリ
 「自分が楽しいと思う川遊 し、白とア
 びを、訪れた人にも伝えた 川と沈下橋
 い」と活動している。現 010)を
 在、館長を務める傍ら08年 ゴマークを
 11月にリニューアルしたウ トバカンス
 エブサイト「四万十・川の ピーも決め



駅 カヌー
 www.can
 に精を出す
 「パソ
 り、川にい